

「祈り」という言葉を聞いて、どのようなものを想像するでしょうか。神社やお寺で手を合わせる姿、大切な人の幸せを願う心、あるいは何かを強く望む気持ちなど、人それぞれ様々な思いを抱くことでしょう。

第82回文化財展「いのっぺ せんだい ー土偶からはじまる祈りの文化財ー」では、それぞれの時代に生きた、人々の「祈り」を感じることでできる様々な文化財とその歴史を紹介します。【いのっぺ(祈っぺ)】とは、「祈り」と東北地方の方言で「～しよう」という意味をもつ「～すっぺ」を合わせた造語です。文化財の展示を通して、ご来場いただいた皆様と一緒に、時代を超えた人々の祈りや願いを感じながら、仙台の様々な歴史に触れて親しんでもらいたいという願いが込められています。

今からおよそ4,000年前の縄文時代に、人々が土をこねて生み出した土偶への祈り。縄文人はいったいどのような祈りを込めていたのででしょうか。土偶たちの表情や形から、縄文人の切なる願いを感じ取っていただけははずです。さらに、古墳時代の埴輪への祈り、中世の寺院や霊場での祈り、近世・近代の生活の中に根付いた祈りへと、人々の「祈り」の対象や形は時代の移り変わりとともに変化していきました。

仙台市内には、数千年にわたって形を変えてきた、人々の「祈り」を今に伝える文化財が、実に多種多様に存在します。

今回の展示を通して、皆様に少しでも仙台の文化財を身近に感じていただければ幸いです。貴重な文化財との出会いを通して、時代を超えて現代につながる人々の祈りの文化を、ぜひ心ゆくまでお楽しみください。



# ハート形土偶に込められた祈り



大野田遺跡から出土したハート形土偶の頭部

大野田遺跡は、太白区大野田に位置する縄文時代から古代にかけての大規模な遺跡です。名取川と<sup>ざる</sup>笹川の洪水によってできた、やや高い土地の上に所在しています。

1984年の発掘調査では、縄文時代後期前半の遺物が多数出土しており、特にハート形土偶を中心に破片を含み300点以上の土偶が見つかっています。これは宮城県内では最多の点数です。また、これ以外にも墓と考えられる<sup>はいせき いこう</sup>配石遺構や土器を埋めた遺構などが見つかっています。特に土器をお棺にした墓は、幼い子どもや<sup>たいじ</sup>胎児を葬ったものと考えられています。この遺跡は、墓地と考えられる遺構に加えて、<sup>せきとう</sup>石刀など<sup>さいし</sup>祭祀に関連する遺物が多く出土していることから、<sup>まいそう</sup>埋葬と祭祀的な行為が一体に行われた場所だった可能性があります。

## いろいろな顔に注目!

大野田遺跡から見つかった土偶は、ハート形の頭に長い胴、ガニ股の足といった特徴があります。特に頭の部分は、顔が前面に飛び出しており、まるで仮面をつけているようです。頭の上に伸びたちょんまげのような突起も大変ユニークです。

これらの土偶は、よく見ると目や鼻、口の形が違ってみんな個性的な顔つきをしています。自分や友達に似ている顔があるかもしれません。縄文人が土偶に込めた願いを想像してみてください。





# 大きな土偶に込められた祈り



## 伊古田遺跡で最も大きい土偶が出土した状況

伊古田遺跡は、太白区大野田に位置する縄文・古墳・平安時代にかけての集落遺跡です。名取川と<sup>ざる</sup>笹川の洪水によってできた、やや高い土地の上に所在しています。

1984年の市営地下鉄南北線建設に伴う発掘調査では、縄文時代後期(約4000～3000年前)に堆積した地層から、縄文土器や石器、土偶など様々な遺物が出土しました。その中でも特徴的なのは、突き出した顔に細長い胴、踏ん張った脚という全身の姿がわかる4点の土偶です。中でも最大のものは、高さが41.4cmもあり国内最大級の大きさを誇ります。

伊古田遺跡から出土した最大の土偶については、その大きさから、個人的に使用されたものではなく、村全体での<sup>さいし</sup>祭祀に使用された特別なものであった可能性が考えられます。

## 座った姿の土偶?

伊古田遺跡からは、座った姿の土偶が1点出土しました。うずくまっている姿で膝を腕で抱えているような姿勢をしています。背中には格子状の文様と背筋のような線が表現されています。

こうした座った姿が何のポーズなのかはよく分かっていません。お産の姿、まつりの場での姿勢、埋葬時の姿などいろいろな説があります。なぜ座っているのか、その意味を考えてみるのも面白いかもしれません。





# 多彩な祭祀遺物に込められた祈り



川前遺跡から出土した岩偶

川前遺跡は、太白区富沢に位置する縄文時代後期から晩期(約4400～2400年前)の集落遺跡です。名取川とざる茨川の洪水によってできた、やや高い土地の上に所在しています。

2015年の発掘調査では、縄文時代後期の竪穴住居跡と縄文時代後期～晩期に堆積した層から、土器や石器などの日用品の他、石刀、土偶、岩偶、岩版などの非実用的な遺物が大量に出土しました。これらの特殊な遺物は祭祀に用いられたと考えられます。また、これらの遺物を含む層が何層にも重なっていることから、長い期間、繰り返し祭祀が行われていたようです。これらの遺物は、精巧な土器や遮光器土偶で知られる東北地方の縄文時代晩期を代表するかめがおか亀ヶ岡文化に属するもので、市内では極めて出土例が少ない貴重な資料です。

## 土偶・岩偶に注目!

ここで展示している土偶は、文様がほとんどないのが特徴です。同じ時代の土偶は顔や複雑な文様が描かれることが多く、とてもレアなタイプです。

一方で岩偶は、まん丸い目、長方形の鼻などはっきりと顔が表現され、顔、体には左右対称に線が描かれていて凝ったデザインをしています。

装飾の差はあれど二つともとても可愛らしい形をしています。「誰かをモデルにして作ったのかな」「あのアニメのキャラクターに似ているかも」など色々想像しながら見ると一層楽しめると思います。





# はにわ 埴輪に込められた祈り



大野田古墳群37号墳と出土した埴輪

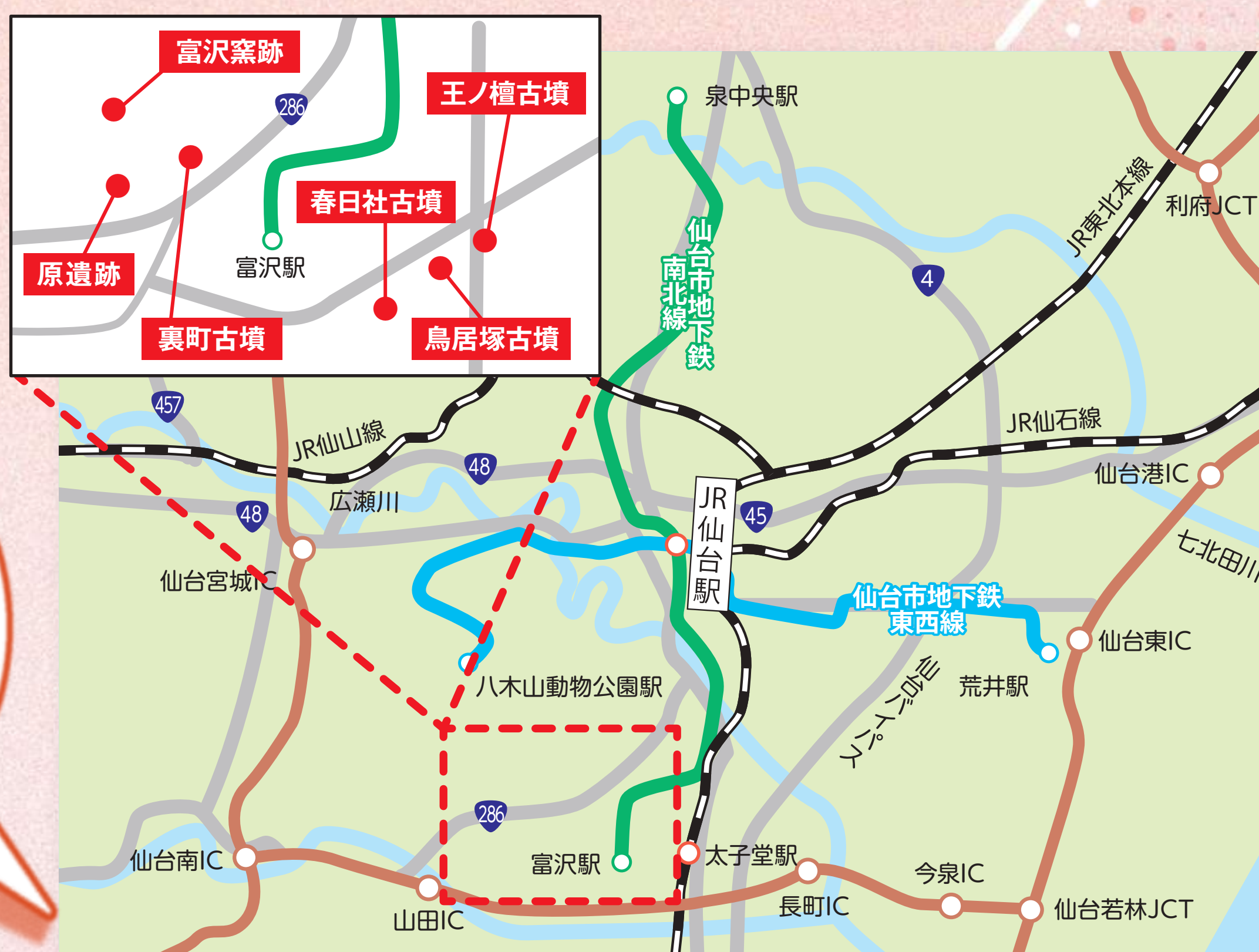
仙台市内では古墳時代前期末(4世紀末)頃から古墳が造られ始めました。古墳時代中期後半(5世紀後半)頃になると埴輪が並べられた古墳が造られるようになります。古墳時代中期に造られた裏町古墳(太白区西多賀)は全長約50mの前方後円墳で、墳丘からは円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土しています。古墳時代中期後半から後期初頭(5世紀後半～6世紀前半)に造られた大野田古墳群(太白区大野田)ではこれまで45基の古墳が見つかっており、円筒埴輪を中心に、鳥形埴輪や家形埴輪などの形象埴輪も出土しています。その中でも家形埴輪は墳頂に置かれていることが多く、埋葬された人の魂が宿る場所だったという説があります。

## 円筒埴輪の孔に注目!

円筒埴輪は、古墳の墳丘やその周りに並べられたことが分かっており、古墳を特別な空間にするため境界の役割として並べられたという説があります。

円筒埴輪にあるスカシ孔は、魔よけ用の文様の名残りとも考えられています。

仙台市内で出土した円筒埴輪には半円形と円形のスカシ孔があり、その違いから埴輪専門の職人グループが2つ存在したと考えられます。円形のスカシ孔がある円筒埴輪は、富沢窯跡(太白区三神峯)で製作されたと考えられます。





# きん かん まが たま 金環と勾玉に込められた祈り



茂ヶ崎横穴墓群遠景

横穴墓は飛鳥～奈良時代(7～8世紀頃)に丘陵の斜面に横穴を掘って造られた墓で、市内では大年寺山や愛宕山に数多く見られます。これらの横穴墓群は、造られた年代や位置関係から、郡山遺跡(太白区郡山)にあった役所に関わりのある人たちが造ったと考えられています。

このうち茂ヶ崎横穴墓群(太白区茂ヶ崎)では、1988年に25基もの横穴が見つかりました。遺物としては、土器のほか、金の耳かざりである「金環」や首かざりに使用されたと推測される勾玉や管玉などが400点以上出土しました。加えて、刀や馬具も見つかっており、亡くなった人が身に付けていたものや関わっていた仕事の内容を推測することができます。これらの資料からは、先祖の安らかな眠りを願った当時の人々の祈りが伝わってきます。

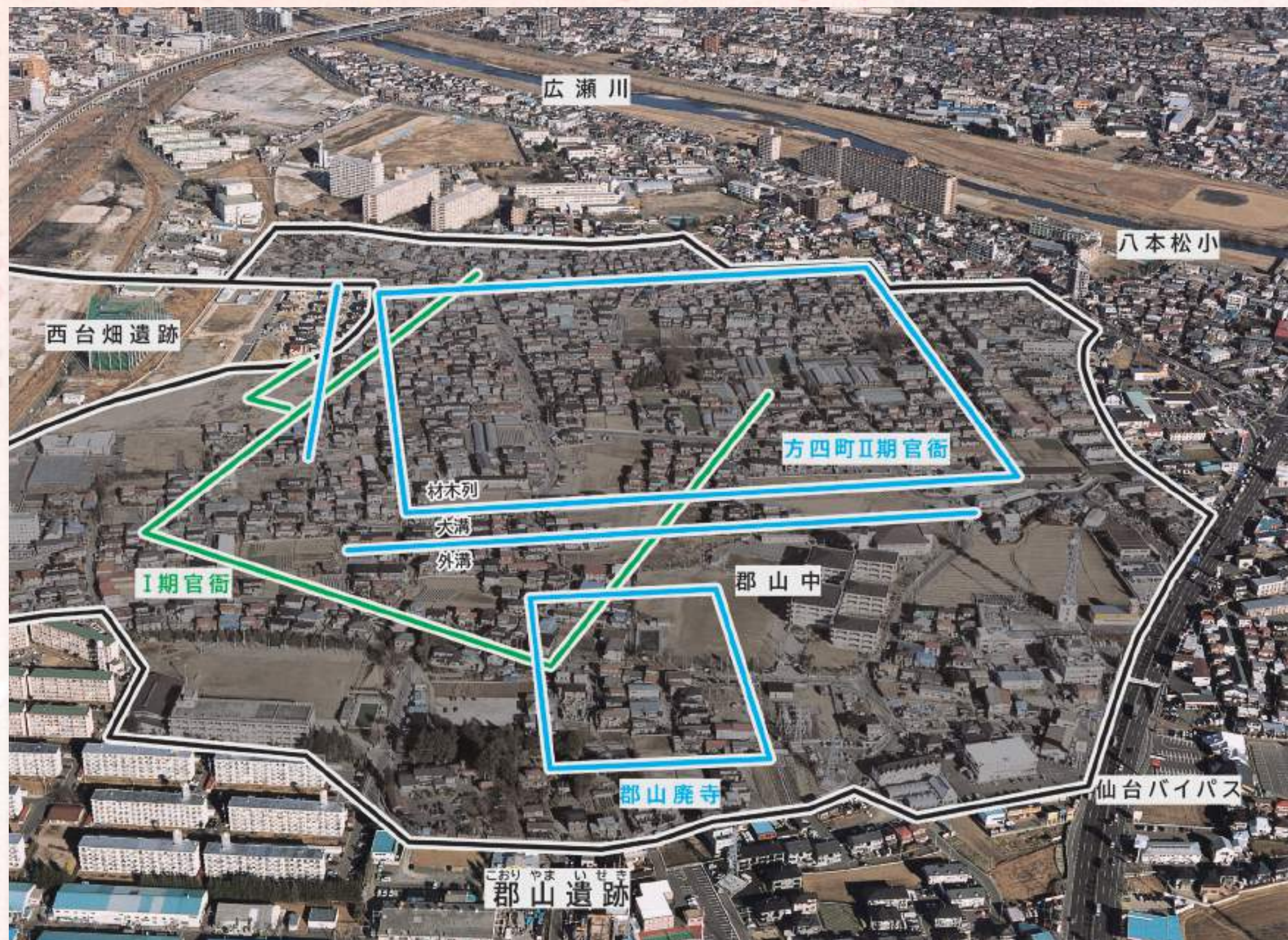
## 横穴墓からおしゃれ発見☆

金環は「耳環」と呼ばれる耳かざりのひとつです。輪っか状になっており、イヤリングのように耳につけていたと考えられています。茂ヶ崎横穴墓群で出土した金環は、銅で作られた輪に金をコーティングしたものです。

横穴墓には金環のほかにも多くのアクセサリーが副葬品として出土しています。当時の人々はどのような祈りを込めて、これらの副葬品を亡くなった人とともにお墓に納めたのでしょうか？



# 役所に伴う寺院での祈り



郡山廃寺の位置



郡山廃寺跡の建物配置

郡山廃寺跡は、太白区郡山に位置する、飛鳥～奈良時代の寺院跡です。畿内で中央集権的な国づくりが始まったころ、東北地方の北側は蝦夷が住む土地と認識され、国家の範囲外とされていました。そして中央政府は、陸奥国(東北地方太平洋側)を治める拠点として、郡山に役所(官衙)を設置しました(郡山遺跡)。この役所は設置からしばらくして、多賀城に移転する以前の陸奥国府となり、郡山廃寺はそれに付属する寺院として造営されました。

郡山廃寺では、仏教の力による陸奥国の円滑な統治を願い、祈りがささげられた可能性が考えられます。陸奥国府が多賀城に移った後もしばらく存続しており、多賀城の付属寺院である多賀城廃寺とともに、古代陸奥国の国家的な祈りの場であったと推測されます。その後、陸奥国分寺や陸奥国分尼寺がつくられた頃には役割を終えたと考えられています。

## 瓦は限られた建物にだけ!

郡山廃寺は、材木を立て並べた塀で囲んだ中に、いくつかの建物が建ち並んでいたことがわかっています。瓦がまとまって出土した場所があるため、瓦葺きの建物があったと考えられています。

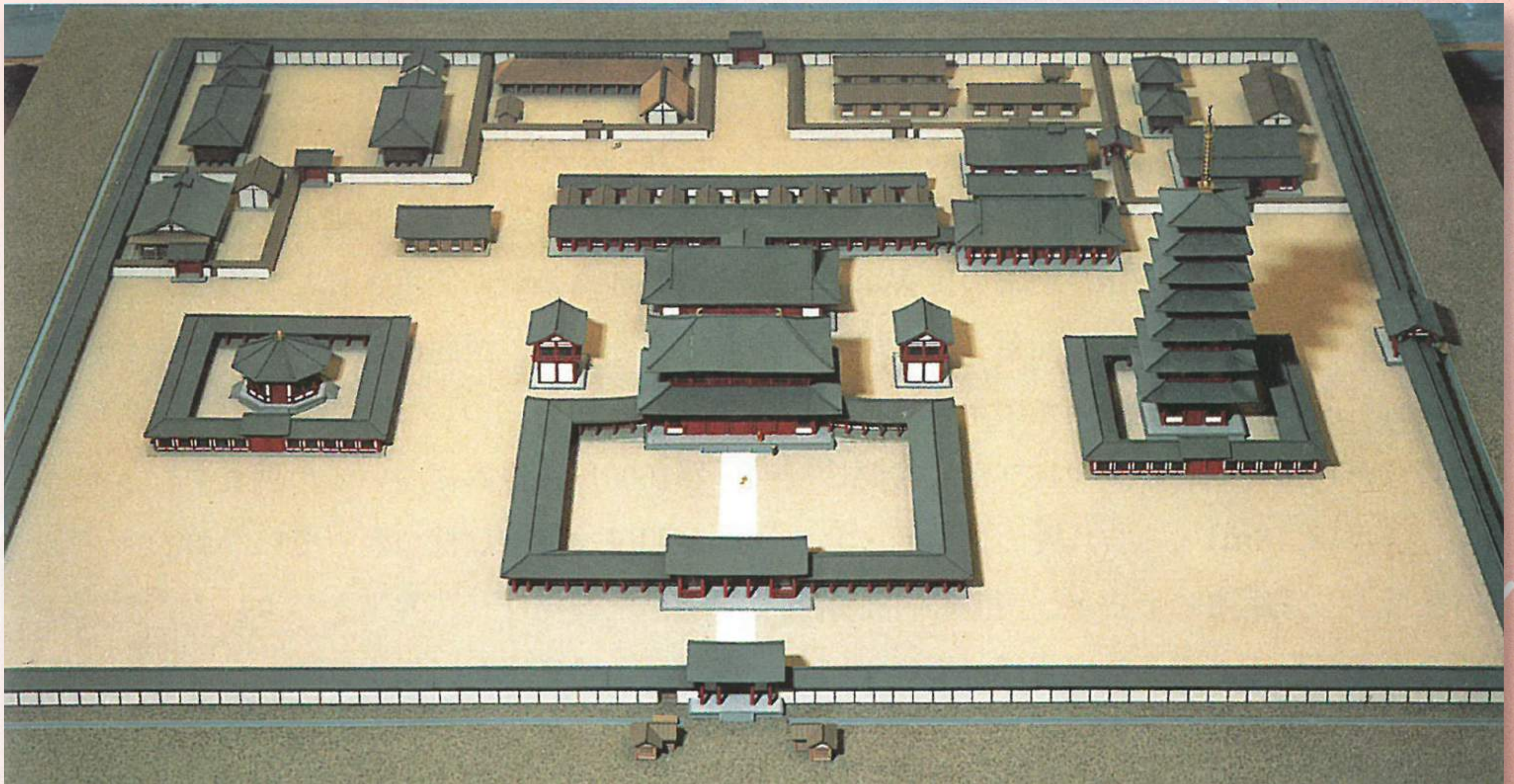
飛鳥～奈良時代の瓦葺き建物は、役所や寺院などの中でも限られた建物だけにみられます。

郡山廃寺では、僧たちが集まってお経をよんだりする建物(講堂)などが瓦葺きであったと考えられています。





# 最北の国家的寺院 国分寺での祈り



陸奥国分寺の復元模型（仙台市博物館蔵）

若林区木ノ下に位置する陸奥国分寺は、奈良時代（8世紀）に聖武天皇の命で全国に設けられた国分寺の一つです。当時、大流行した疫病や社会不安をとりのぞき、仏教の力で国の安定を図るため、国分尼寺とともに陸奥国（東北地方太平洋側）の中心的な寺院として建立されました。かつては壮大な七重塔や金堂があり東北の仏教文化の拠点でした。

その後、度重なる戦乱や災害により衰退しましたが、1607（慶長12）年に伊達政宗によって再興され、現在も薬師堂や仁王門が残されています。1955年から続く発掘調査により古代の国分寺の規模や構造が明らかにされつつあります。かつて聖武天皇が国の平和を願った祈りの場は、現在、調査成果に基づき史跡として整備され市民の憩いの場となっています。

## 瓦に刻まれた文字や印に注目!

陸奥国分寺の建物の屋根は瓦葺きでした。これまでの発掘調査でも、当時の建物の屋根に使われた瓦が大量に見つかっています。出土した瓦の中には、文字や印がヘラや指で書かれたり、刻印が押されていたりするものがあります。これらの文字や印は、瓦の製作費用を負担した人や地域を表すためのものと考えられます。これらの痕跡は、祈りの場の造営に多くの人々が携わったことを示しています。





# 中世霊場での祈り



東光寺遺跡西平場の板碑群

宮城野区岩切は中世(鎌倉～戦国時代:12～16世紀)の遺跡が密集する場所です。当時は「奥大道」という鎌倉からの幹線道路と、海につながる水上交通の幹線である七北田川が交差する交通の要衝地でした。七北田川の右岸には市場であった鴻ノ巣遺跡があり、左岸には霊場として周辺の武士や庶民が祈りをささげた東光寺遺跡があります。また、その背後の山上には大規模な山城である岩切城跡があり、山麓には武士の屋敷跡である洞ノ口遺跡があります。

現在の東光寺の境内には、鎌倉時代から南北朝時代(12～14世紀)にかけての石窟仏(崖を彫り込んで仏像を刻んだもの)や122基もの板碑が残っています。これらは自分や家族の死後の安楽を願い作られたものです。祈りの痕跡としての板碑や遺跡の出土品からは、争いなどにより死が身近にあるこの時代の人々が、公的な権力に頼らず自らの幸福を願う自力救済という考えを強く持っていたことがうかがえます。

## 板碑の文字に注目!

板碑は石製の供養塔で、石碑の上部中央に梵字という古代インド文字の一種が彫られています。この一文字でさまざまな仏様を表しており、阿弥陀如来や大日如来、地蔵菩薩、不動明王など多くの種類があります。当時の人がどんな仏様にどんな願いをしていたのか、ぜひ想像してみてください。





# ミニチュア呪物に込められた祈り



## 仙台市内の遺跡から見つかった豆甕



今回の展示での「ミニチュア呪物」とは、恐ろしい「のろい」の道具ではなく、人々がさまざまな願いを込めた「まじない」の性格をもつ小さなモノという意味で名付けたものです。江戸時代の遺跡を発掘調査すると、七福神や、サル、イヌなどの土製品がよく出土します。

こどものおもちゃにも見えますが、これらの遺物には当時の人々の願いや思いが込められています。例えば、イヌには安産や子孫繁栄の意味があり、こどもの守り神ともされたようです。

また、幕末頃の仙台城跡を中心に出土するミニチュア呪物として<sup>まめがめ</sup>豆甕があります。実際の使われ方は謎ですが、「御落成」の字が墨で書かれた例(仙台城二の丸跡出土)や幕末の古民家の屋根裏からワラに包まれて見つかった例(加美町切込焼<sup>きりごめやき</sup>の資料)があることから、新築の祝いや家の繁栄を願うまじないの道具として使われたのかもしれませんが。小さな甕に祈りを込めるまじないは、幕末頃の仙台で流行していたようです。

## 近代の豆甕「カメッコ」

第二次世界大戦中のこと。青葉区堤町で「カメッコ」という手のひらサイズの甕が作られていました。大きさは近世のものより少し大きく5cm程です。市民は、こどものせきがひどい時にこれを買って求め、治るとお礼として数を倍にして神社に納めたそうです。

はじめは仙台城や武家屋敷で行われていた、小さな甕に祈りを込めるまじないは、明治時代以降、次第に意味合いが変化しカメッコとして仙台市民の間に広まっていったのかもしれませんが。

